

PANEL DISCUSSION / ポジショントーク

生成AI・DXで進化する知財ライセンス — AIファースト時代の戦略転換

知財業務全般から渉外・契約まで—「前提」が崩れる時代に、どこへ軸足を移すか

2026年7月11日

よろず知財戦略コンサルティング 代表

(一社) 知財・無形資産ガバナンス協会 生成AI活用推進協議会 共同代表

医学博士 萬 秀憲

hidenori.yorozu@yorozuipsc.com <https://www.yorozuipsc.com>

自己紹介 よろず知財戦略コンサルティング 代表 萬 秀憲

1976年～花王(株)入社 商品開発研究（入浴剤バブ等開発）、栃木研究所室長など。

1999年～大王製紙(株)入社 家庭紙開発部長、執行役員知的財産部長など。

2020年～よろず知財戦略コンサルティング代表 知財コンサルティング活動

2021年～知財ガバナンス研究会（現：知財・無形資産ガバナンス協会）

コーポレートガバナンス報告書における知財投資の開示内容調査、知財・無形資産投資活用戦略の進め方、投資家への情報開示の在り方

2021年～知財AI活用研究会（現：知財DXラボ）機械学習を利用したSDI調査の検討⇒機械学習＋生成AI活用

2025年12月～知財・無形資産ガバナンス協会

生成AI活用推進協議会 共同代表

2026年 6月～知財・無形資産ガバナンス協会 理事

（一社）知財・無形資産ガバナンス協会

調査研究
事業

知財ガバナンス研究会

生成AI活用推進協議会

知財業務分科会（権利化等の知財業務での生成AI活用）

戦略策定分科会（価値創造戦略策定のための生成AI活用）

課題解決分科会（生成AI活用促進に向けた課題解決）

STEP 1: 従来手法

IPC/FI + 全文で、漏れを防ぐ広めの検索式で母集団を作成。
機械学習を利用、タイトル・要約・請求項で社内分類を付与。

課題： 特定分類(402, 506)の精度が低い(約70%)。

原因：タイトル・要約・請求項だけでは特徴がつかみにくい



STEP 2: 生成AI活用

明細書全文 × 構造化抄録

91%

特徴が表れている明細書情報を加味するため、生成AIを活用。

打ち手： 明細書の特徴を生成AIに要約させた「構造化抄録」
を判定の特徴量として追加採用。

企業知財部門で生成AIがどの程度使われているか？

(2026年1月、5月)

1. 汎用AI:90%以上、知財専用AIツール:50~60%、自社専用:15%~30%

2. 生成AIの活用レベル(自社認識)

Lv1(個人的利用): 10~30%

Lv2(一部業務で利用): 50~70%

Lv3(日常業務で標準利用): 10%

Lv4(高度な自動化・戦略的活用): <10%

3. 効果測定(時間削減・品質向上など)の状況

測定していない 50~70%

一部測定している 30~50%

定常的に測定している <5%

ChatGPT一強から熾烈な競争で急速に進化している生成AI

AIの進化の8段階(ソフトバンクによる)

レベル1:人間とほぼ同等の一般的な会話が可能なAI。(ChatGPT-4o、2024年5月:IQ90)

レベル2:大学の博士号レベルの知識を持つAI。(OpenAI o1、2024年9月:IQ120) ※IQ120:上位10%

※IQ135:上位1%

レベル3:エージェント機能を持ち、人間の代わりにタスクを実行するAI。(OpenAI o3、2025年4月:IQ134)

(ChatGPT-5、2025年8月:IQ148)

レベル4:自ら新しい発明を生み出すAI。

(Gemini 3 pro、2025年11月:IQ 142)

レベル5:組織的に活動し、仕事を遂行するAI。

(ChatGPT-5.2 pro、2025年12月:IQ147)

レベル6:感情を理解し、長期記憶を持つAI。

レベル7:自ら意思を持ち、人類の幸せを目指すAI。

レベル8:調和の取れた超知性。

レベル5まで満たすと

AGI (人工汎用知能: Artificial General Intelligence)

レベル6～8を満たすと

ASI (超知性: Artificial Super Intelligence)

人のように働くAIが登場

● 本稿でのAIエージェントの定義と生成AIとの比較

従来型の生成AI (例: 知財単タスク)

人がすべてを指示



↓
プロンプト
(例: 特許文献
を翻訳して)



単作業

- 指示された特定の特許文献を翻訳
- 特定の請求項の形式的チェックを実施

AIエージェント (例: 特許ランドスケープ作成)

人に頼まれた複雑な仕事をAIエージェントが自律的に代行
成果物



プロンプト(自社技術Xに関する
特許ランドスケープを作成して)

特許ランドスケープ・レポート

AIエージェントがプロジェクト全体を管理



工程1
関連文献の
自動収集



工程2
請求項の深度分析
& スコアリング



工程3
市場・競合ラン
ドスケープの構築



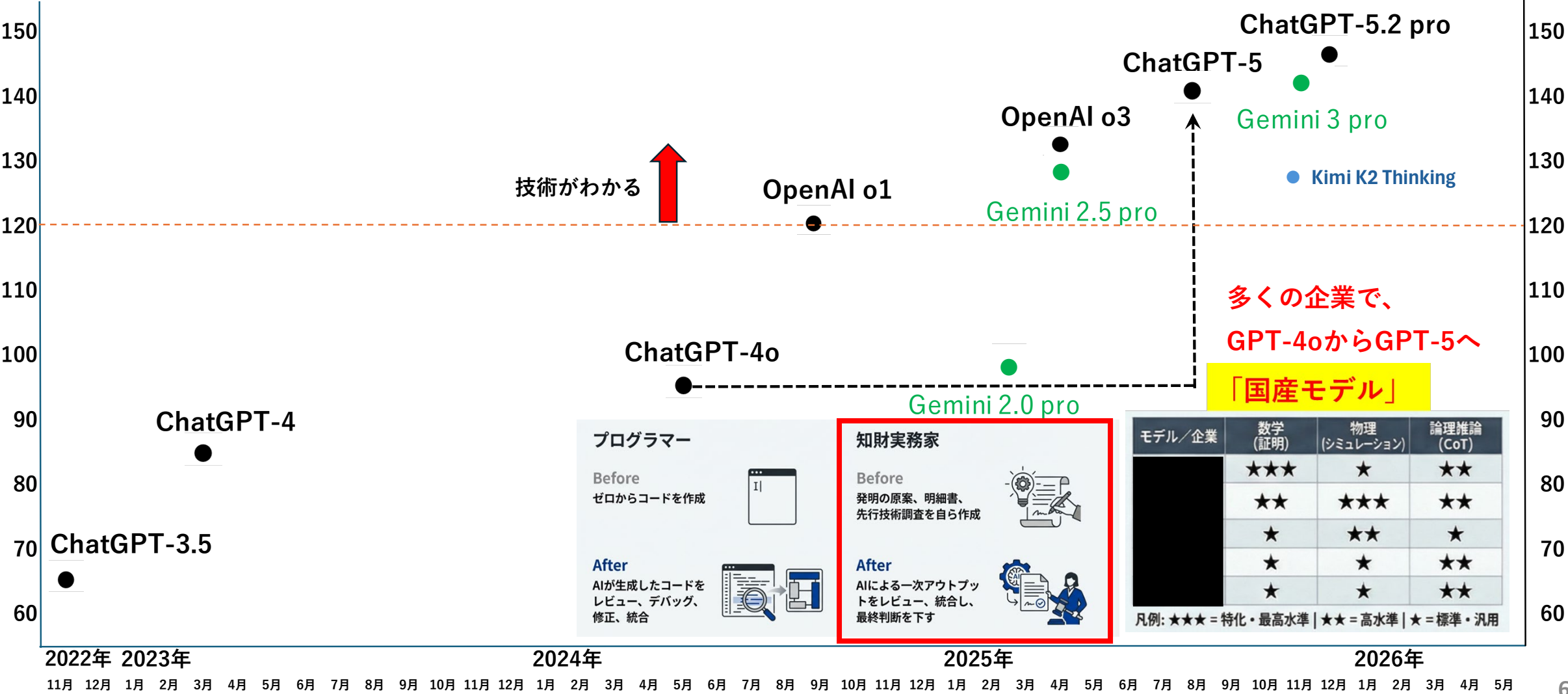
工程4
レポート自動
生成・視覚化

- AIエージェントがプロジェクト全体の目標(ランドスケープ作成)を自律的に管理
- 各工程の単作業AIへ指示を送り、結果を統合して次の複雑な工程に進む
- 最終的に完成した「特許ランドスケープ・レポート」を人へ返す

進化の第3段階に入った生成AI

知能指数
(Mensa Norway)

推論モデル Deep Research Nano Banana



生成AIの 知財実務 への応用

但し、現状は
中堅レベル

表1 生成AIの知財業務への用途別評価 [2026年1月現在] (筆者作成)

		生成AIを そのまま利用	社内外データ との連携	外部ベンダー サービス利用
特許調査	検索式作成支援	○	○	○
	SDI支援 (AI自動分類)	○	○	○
	分類作成支援	○	○	○
	技術動向調査支援	○	○	○
	特許の読み込み支援	○	○	○
出願・権利化	発明発掘支援	○	○	○
	特許提案書作成支援	○	○	○
	特許明細書作成支援	○	○	○
	拒絶理由通知の分析支援	○	○	○
	拒絶理由通知の対応作成支援	○	○	○
	発明評価支援	○	○	○
知財戦略	権利活用支援	○	○	○
	IPランドスケープ支援	○	○	○
	知財戦略立案支援	○	○	○
知財教育支援		○	○	○
外国出願 (翻訳) 支援		○	○	○
意匠		○	○	○
商標		○	○	○
知財契約書作成支援		○	○	○

○=実務投入可 (レビュー前提) / △=限定利用・PoC向け / ×=非推奨

1 知財業務の「前提コスト」が崩れる

調査・分析・ドラフトに時間がかかることを前提に、知財業務は組み立てられてきた

第一段階



今までの業務が速くなる

先行技術調査・無効資料収集・明細書ドラフト・契約レビュー・翻訳。“時間がかかるから”が常態だった作業が一気に短縮。

第二段階（本質）



諦めていた分析が日常になる

コスト的に手をつけられなかった広域ランドスケープや継続的モニタリングが、日常的にできるようになる。



付加価値の所在が移る：「作業をこなすこと」から「何を分析させ、どう判断するか」へ。

2 情報の非対称性が「両側から」溶ける

渉外・契約の焦点 | ライセンス交渉は、突き詰めれば情報の非対称性の上に成り立ってきた

これまで

分析力 = 交渉力

相手ポートフォリオの強み・弱み、自社製品の抵触範囲、特許価値——精緻に分析できる側が交渉を有利に進めた。



生成AI・DX 以後

分析コストが激減し、相手も同じことができる

クレームチャート・無効資料調査・ランドスケープ・バリュエーションが従来の数分の一に。優位は片側に留まらない。



交渉の本質がシフトする：「情報優位を競うゲーム」から「戦略構想力と人的な信頼・交渉力を競うゲーム」へ。

3 「AIファースト」＝業務の起点が変わる

既存業務にAIを“足す”ことではない。業務設計の起点をAIに置き、人間は判断と例外処理へ回る



知財バリューチェーン全体で起点が変わる

出願 → 権利化 → 活用 → 係争 | ポートフォリオは防衛的な“貯め込み”から、事業戦略から逆算しAIで継続的に棚卸し・選別する発想へ。

4 最大の論点は「ガバナンス」

知財業務には固有の壁がある。使い方を誤れば、効率化どころか重大な事故になる



情報管理の事故

発明の未公開情報や、秘密保持下の他社情報を安易に外部AIへ投入すれば即座に漏えいリスク。



品質の毀損

ハルシネーションを含む出力を、そのまま権利化や判断に持ち込むリスク。



入力データの権利処理

学習・参照させるデータの著作権・契約上の扱いという新しい論点。



だからこそ、業界としての共通規範が要る

「どこまで・どう使うか」を整える——生成AI活用推進協議会が取り組むのは、まさにこの“安全に使うための土台づくり”。

まとめ

AIファースト時代の知財プロフェッショナルとは、

AIに奪われる存在ではない。

AIを使いこなし、上流へ軸足を移す存在。



戦略
構想する



判断
意思決定する



信頼
関係を築く

——“人にしかできない上流”を、本日のディスカッションで皆様と掘り下げます。